

グレーサー病の実態、その克服のために

鹿児島県・藤原動物病院 藤原孝彦

はじめに

グレーサー病はヘモフィルス・パラシスイス (*Haemophilus parasuis*) 菌によって引き起こされる豚の全身性感染症であり、多発性繊維索性漿膜炎、関節炎および神経症を伴う髄膜炎が主な症状として、日和見感染的傾向が強く、急激な温度変化や輸送後、郡編成の後など、環境の変化と強い因果関係があります。

特に、離乳直後から肥育前期のある程度弱令期に多発する傾向が強く、世界各国で発生が見られます。

この菌は、一般の養豚場の健康な豚の鼻粘膜に常在的にみいだされ、特にSPF豚に対しては強い病原性を示すので有名ですが、最近は一級養豚場でも集団的

に発生する例が増加したようで、豚の免疫状態との関係が影響しているのではないかと考えています。

この疾病は一九一〇年にG.P.S.によって報告され、日本では一九七一年に溯上らによって初発報告されて以来、全国各地

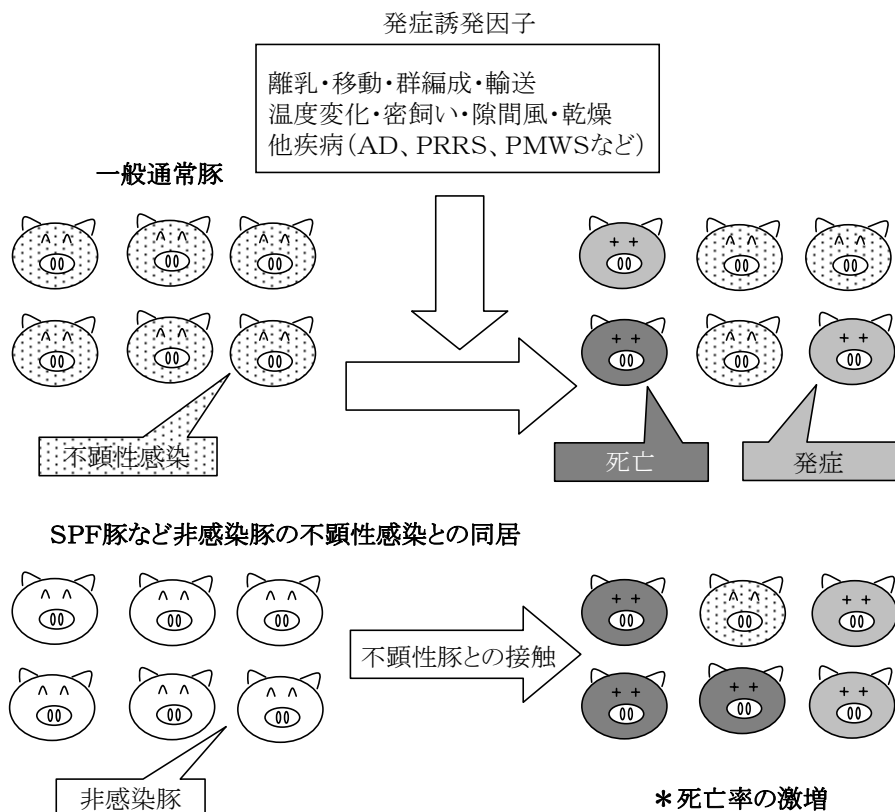


図1 グレーサー病の発生の機序

表1 死亡豚の主な肉眼的病変

病変	肉豚							子豚				母豚
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
胸水・心嚢水貯留	+	+	++	+	+	+	++	-	+	+	+	+
肺・心・胸壁の癒着	+	+	-	+	+	+	++	+	+	+	+	++
心嚢炎	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+
腹水の貯留	-	+	+	-	-	-	-	-	+	+	+	+
腹腔内の繊維素析出	+	+	+	-	-	-	-	-	+	+	+	++
リンパ節の水腫性腫大	*	+	+	-	+	+	+	+	+	-	-	+
脳脊髄液の混濁	*	*	-	-	+	-	*	*	*	+	-	*
関節液の増量・混濁	-	*	+	+	+	+	+	+	+	+	+	*

注) * : 検索せず、-~++ : 病変の程度

(天野、1992)



写真1 腹腔内繊維素析出(卵とじ状)(日生研:高橋ら原図)

で限局的で散発的な発症認められてきました。

好発時期

離乳直後から肥育前期にかけて

が好発時期です。離乳や移動後、群編成後、飼料の切り替えおよび

気温の変動などストレス因子が大きく関与していると考えられます。

へモフィルス・パライス菌は、一般養豚場の健康な豚の鼻腔内にも、無害菌

として常在し、不顕性感染状態になっていきます。この状態に、先ほど述べたストレス因子といった発症誘発要因などに暴露されると、疾病が顕性化し発症となり、一部は死亡へとつながります。

SPF豚を一般農場に導入し不顕性感染豚(見た目は健康豚)と接触した場合などは急速に発症し多数の死亡が発生する場合があります。

しかし、最近一般農場においても、一時的にSPF農場で発生するような大量発生するケースが増加しているように思われます。

発生の機序は図1に示しました。

症状・病変

(1) 一般症状

発熱(40.0~42.0℃)を伴っ

て発症し、急性のものが多く見られます。

食欲不振や元氣消失しうすくまったり、耳翼にチアノーゼや



写真2 心嚢膜炎および癒着（日生研：高橋ら原図）

炎症、腹膜炎を起こし、臓器の周りがいわゆる卵とじ状態で胸水

断には一般症状と剖検所見の他に菌分離および病理所見が必要となります。

(2)剖検所見

どの場合、甚急性の経過をたどり、何も症状を示さず死亡するケースもあります。

や腹水の貯留も確認できる場合が多く見られます（表1、写真1、2）。

P F 豚な特に S

合もあり

現れる場

経症状が

などの神

遊泳運動

立不能、

伴うと起

髄膜炎を

の腫脹、

たは関節

ます。ま

認められ

器症状が

など呼吸

腹式呼吸

表2 飼育環境の見直しで重要な事項

①豚の寝方

- ・特に夜間どのような状態か？
- ・扉の開け閉めで驚かして起こさないように観察する。
- ・豚自身が一番の情報源。

②温度湿度計測記録

- ・豚の高さで、その時期の条件の悪い方の場所で計測する。
- ・室内上部と下部で温度差がある場合上部の空気を降ろす策をとる。
- ・数字的なものの他に五感を研ぎ澄ます。

③隙間

- ・日中カーテンを下ろし外側に向けて日光が入る場所があるか？
- ・特に扉付近、上下カーテンの重なり、袖カーテンとの重なりが少ない場合、スクレパー部分や換気扇排気口などに注意する。
- ・隙間補修は豚舎の外側から舎内にビニールを垂らしている場合が多いが、舎内に侵入した空気はどこかへ逃げなければならないため、下方への流れと変わる。

④豚自身が適切な環境を選べるか？

- ・密飼になっていないか？
- ・換気は適切か？
- ・オールスノコの場合には初期にはゴム板などの床部分があるか？
- ・隅々までの室温全体のコントロールが困難な場合は簡易的でも保温箱（天井、壁、床）は設置されているか？
- ・現在の保温設備は適切かどうか？
- ・飼槽、水のみが適切で十分に清潔であるか？

対策

治療に対してはペニシリン系
抗生剤やトリメトプリム＋サル
ファ合剤（S T合剤）などが有
効です。

離乳後に多発する農場は、離
乳時に注射剤の接種および離乳
豚初期飼料への上記の添加剤投
与が必要通常豚に対してもワク
チンも有効である報告（S P F
研究会報、日生研・高橋ら）が
あります。ただし、現在使用さ
れているものも、ほぼS P F農
場専用のような利用の方法にな
っているようです。メーカー側
も、もっと使用しやすくする方
法を模索をしているようなので、
管理獣医師を通して相談するの
も良いと思われます。

薬剤だけで対策をとるのでは、
再発を繰り返したり、発生時期
を遅らせたりして、なかなか改
善が難しく、長引く場合が多く

なります。

発症を引き起こす引き金とな
る発症誘発因子としてのストレ
スが強く関与しているため、P
R R Sなど他疾病対策と同じよ
うに飼育環境の見直し改善など
も併せて行うことが、重要なポ
イントだと思われます。飼育環
境の見直しで重要なことは、観
察と点検となります（表2）。

まとめ

この疾病は日和見的性質を持
つため、日常飼育管理体制と観
察がもっとも重要なポイントと
なります。どこか不備なところ
はないか、豚の肥育効率に悪影
響を及ぼす因子は隠れていない
かという疑問の視点を常に持ち、
日常の管理観察の基本を実践す
ることが、グレーサー病の発症
を防ぐ上で大切であると思われ
ます。

